



第39回 日産 童話と絵本のグランプリ

まいごのこもれび

はやし だ か な
林田 香菜

よく晴れた、気持ちのいい午後でした。野原のまわりに立つ木々のあいだからは、あたたかな日の光がこぼれ落ちていきます。

アヤさんは、一本のケヤキの下で本を読んでいた。

開いた本のページの上にも、こもれびが降りそそぎ、風が吹くたびにゆれる葉っぱにあわせて、文字の上でチラチラと踊っています。

やさしいこもれびに包まれて、本を読むことが、アヤさんの一番のお気に入りでした。

じんわりと夕暮れが広がってきて、本の上に落ちる葉っぱの影が濃くなってきたら、アヤさんは「さて」といつて、本を閉じました。

そして、バスケットの中に、朝から焼いたクッキーの包みと水筒と本を入れました。

その上に、敷物代わりにしていたひざかけをたたんでのせると、夕日に照らされた散歩道をのんびりと歩いて家に帰りました。

家に着くと、アヤさんは、バスケット

トを部屋のすみに置いて、夕ごはんを作りました。

そして、食事が出来上がると、お皿を並べるために食卓の上の明かりをつきました。

ところが、明かりはチカチカと点いたり消えたりして、今にも消えてしまいそうです。

「ああ、そうだった。電球が切れかけていたんだわ。」

しばらくすると、完全に明かりが消えて、食卓はぼんやりと暗くなつてしまいました。

「困ったわ。なんてタイミングが悪いんだろう。新しい電球はどこにあったっけ。」

アヤさんは、ため息まじりにいいました。

すると突然、部屋のすみのほうで、ポワリとあたたかな光が灯りました。まるで、その場所だけ、陽だまりができたようです。

アヤさんがおどろいて見ていると、ふしぎな光は、プワンプワんとテーブルの真ん中まで飛んできました。とたん

に、食卓が見違えるように、パアッと明るくなりました。

その光は、アヤさんの両手でひとすくいたくらいのおおきさでしたが、ろうそくのゆらめく淡い光よりも元気がよくて、ときどきキラキラと輝いて見えました。

「ねえ、もしかしてあなたは……月明り？ それとも星明りかしら？」

アヤさんはたずねました。

「月明りと星明りはいとこたちです。」

光はこたえました。シャランシャランとすずが鳴るようなかわいらしい声でした。

「それじゃあ、どなた？」

「こもれびです。」

アヤさんは「まあ！」と目を見張りました。

こんなに暗くなつてから、それも、木も生えていない家の中にこもれびがいるなんて。

「本の上でうつかりお昼寝をしていたら、いつのまにかバスケットに入つてこもれびで来てしまったようなんです。」

こもれびは説明しました。そして、

「あのう、それから……、」

と、こもれびは、もじもじしながらいきました。

「クッキーとてもおいしかったです。目が覚めたら、近くでいいにおいがして。なつかしくなつて、つい、少しだけいただいてしまいました。勝手に食べてごめんなさい。」

アヤさんはふふつと笑いました。こもれびがクッキーを食べたなんていうので、おかしくなつたのです。

それに、じまんのクッキーをほめられて悪い気はしません。アヤさんは、おやつに全部食べ切らなくてよかったなと思います。

「クッキー気に入ってもらえてよかった。」

それを聞いてほつとしたのか、こもれびはうれしそうに笑いました。こもれびが笑うと、光はますます明るく、キラキラと輝きました。

「今日、ぼくがここにいてよかったです。」

こもれびが、切れた電球を見ている。「本当にその通りね！ とても助かるわ。食事のあいだテーブルにいてもらつても

いい？」

「もちろんです。」

こもれびは、明るく輝くだけではありませんでした。

こもれびは、お日さまのにおいや風のおいも一緒に連れてきてくれたのです。

アヤさんは、まるで天気の良い日に、心地よい木の下にいるような気分になりました。

「家の中なのに、ピクニックをしているような感じがするわ。青い空まで見えるよ。」

その夜は、特別な夕ごはんになりました。

食事の後片付けが終わると、アヤさんはソファアにすわつて食後のお茶を飲みました。

こもれびがずつとそばにいたので、明かりをつける必要はありませんでした。「ぼく、夜の町を見物してみたいです。」

ふと、こもれびがいました。

アヤさんは、こもれびと夜のお散歩に出かけることにしました。

しかし、夜にこもれびが外に出ると、そのままだ目は立ってしまいます。そこ

で、アヤさんは、物置からランタンを出してきました。

「この中に入ってみて。」

アヤさんの思った通り、ランタンは、こもれびにぴったりの場所でした。

こもれびは、昼間の明るい光で、地面をポワンと照らしました。アヤさんの足もとでは、キラキラと楽しそうな光が踊っています。

足もとの光を見ていると、なんだかずっと前にもこんなことがあったような気がするなど、アヤさんは思いました。けれど、はつきりとは思い出せませんでした。

店や家が立ち並ぶ町の中に着くと、こもれびは、おどろきで言葉が出ませんでした。

強くするどい車のライト、決められた場所をひたすら照らし続ける街灯の明かり、色とりどりにチカチカ光る派手な看板、店の入り口から外にあふれ出すにぎやかな明かり。

まるで町は、光の海のようにでした。こもれびは、いくつもの見慣れない明かりの波に、くらくらししてきました。

「ぼくたちと、ぜんぜんちがうんですね！」

目をしばしばさせながら、こもれびはいいました。

「町の明かりは、ぼくにはちよつと強すぎるみたいです。」

「そろそろ戻ったほうがよさそうね。」

アヤさんは、心配そうにいました。帰る道すがら、こもれびがいました。

「でも、あれは気に入りました。」

こもれびは、たくさんの家の窓からもれ出る、あたたかそうな明かりを指差しました。

「前に、いとこの月明りがいつていたんです。人の住む家から出る光は、上から見ると、まるで星空みたいに見えるって。」

こもれびはいいました。

「それを聞いて、星明りたちは自分たちのほうがきれいだって、怒っていましたけど。」

アヤさんとこもれびは、一緒に笑いしました。

「人は、明かりが大好きなんですね。」

「そうね。暗いと不便だからね。でも、

はげましてくれたことを。

「そうだ、あのときね。持っていたクッキーを、小さな光の子に分けてあげたんだった。」

アヤさんはいいました。

「わたしたちはずつと友だちだったのね。」

「そうですよ。今度は、ぼくがまいごになつてしまいましたね。」

こもれびがキラキラと笑いました。

おしゃべりをしているうちに、家に着きました。

アヤさんが玄関の戸を開けると、どこからかやわらかな風がやってきて、一緒に部屋の中に入ってきました。

風は、テーブルの上にひとひらの木の葉を残して去っていききました。

それは、ケヤキの葉でした。葉には、金色の光の文字でこう書いてありました。『夕日電車に乗り遅れたこもれびがお世話になりました。特別電車が迎えに行きます。』

アヤさんが読み終わると、光の文字はだんだんうすれて、消えてしまいました。「まいご用のお迎え電車が来るみたいです。」

こもれびがいいました。

すると、夜空から、ひとすじの流れ星が落ちてきて、アヤさんの家の煙突から、部屋の中に入ってきました。

よく見ると、それは電車の形をしています。

「アヤさんありがとう。もう行かなくちゃ。」

「ありがとうね。とても楽しい夜だったよ。」

「晴れた日には、朝日電車でやってきます。いつでも待っています。あの野原で。」

こもれびはそういうと、光の特別電車に乗りこみました。

光の電車は、今度は開けた窓から夜空にのぼっていききました。

「帰りは流れ星じゃなくて、のぼり星ね。」

アヤさんは笑いました。

「晴れた日には、会いに行こう。クッキーをたくさん焼いて。」

部屋には、昼間のあたたかい野原の香りがしばらく残っていました。

わたしは、どんな明かりよりこもれびが一番よ。」

こもれびは、うれしそうに輝きました。そして、シャランシャランとすが鳴るような声でいきました。

「じつは、アヤさんのことは昔から知っているんですよ。」

「昔？」

「あのクッキーをアヤさんのお母さんが焼いていたところからです。アヤさんとお話したこともありますよ。」

アヤさんは「えっ」と小さくさけびました。

子どものころから、あの野原へよく遊びに行っていました。でも、いつこもれびと話したんだろう？ アヤさんは首をひねりました。

「それに、小さかったアヤさんは、ぼくにクッキーをわけてくれたんですよ。」

アヤさんは、忘れていた古い思い出を、ようやく見つけ出しました。

小学校に入る前、まいごになつてベソをかいていたアヤさんに寄りそっていた、小さな光のことを。その小さな光が、足もとをキラキラと照らして、

審査員コメント

大人向けの童話では？との意見もありましたが、戦争やコロナなどつらい出来事が多い今だからこそ、大人も子どもも「こもれび」のようなぬくもりのある穏やかな作品を待ち望んでいるのではないのでしょうか。「まいご用のお迎え電車」が来るのも楽しいですね。

吉橋 通夫

林田 香菜

主婦 東京都

受賞のことは

素晴らしい賞に選んでいただき、喜びと感謝でいっぱいです。あらゆるものに物語の種が眠っているのだと思うと、わくわくするし、素敵だなと思います。読む人の中に色とりどりの感情が芽生え、心の温度を感じられるような、温かいお話をつくっていきたいです。

受賞歴 第38回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作

